

《資料》

新資料 吉井勇 『神杉』 原稿 翻刻と校異

田 坂 憲 二
南 里 一 郎
福 田 智 子

凡例に代えて

本稿は、吉井勇の未刊歌集『神杉』（京都府立京都学・歴史館所蔵）の全文翻刻と出典・異同等を示したものである。

『神杉』については、二〇一九年十月六日の和歌文学会大会で田坂憲二が報告した。内容は『和歌文学研究』第一二〇号（二〇二〇年六月）に掲載済みであるので、それに譲ることとし、本資料の重要性についてのみ略記する。

第一には、吉井勇の新出歌集であり、吉井勇全集などの欠を補う、極めて貴重な資料であることである。第二には、『神杉』の出現によって叢書〈決戦歌集〉の二冊目が明らかになったことである。しかも、出版社（印刷所）の割付などが書き込まれ

ており、刊行時の姿を推定しうる。『神杉』は佐佐木信綱・土岐善磨・岡麓ら十二人の歌人による〈決戦歌集〉のうちの一冊であったが、この叢書は一冊も刊行されず、全体像も不明で、残存資料としては斎藤茂吉の『萬軍』が知られるのみであった。第三には、戦後刊行される〈新日本歌集〉と戦時下の〈決戦歌集〉との関係、戦争と短歌と出版社の関係を考える上でも貴重な資料であることである。

このように、吉井勇研究のみならず、近代短歌史においても重要な資料であるので、研究に資するために、翻刻の形で広く公開するものである。

全体を、「翻刻」「注記」「出典・異同」の三つに区分する。翻刻では、当時の印刷標準字体である旧字体の漢字を使用した。また、仮名にはいわゆる変体仮名も見られるが、すべて現

行の字体を使用した。振り仮名も同様である。また、仮名遣いが誤っていても、原稿にある形を尊重した。

原稿では、いわゆる旧字体のほか、略体・異体の漢字が混用されている。また、どのような字体を書こうとしたか判然としない箇所もある。ただ、吉井自身は、しかるべき字体に修正されて印刷されることを認識していたと思われるので、その点を考慮し、本歌集が刊行されていたらこのような字体が使用されたであろうと想定されるものを示すこととした。

ただし、採歌対象となった歌集の紙面で、すべて規範的な字体が使用されているということではない。『神杉』原稿との関係から記述しておくのが適当とみられるものは、ごく少数ではあるが、後の「出典・異同」の中で注として示した(※印)。

注記は、翻刻と並べて参照できるように配置した。これには大きく分けて二つの種類がある。一つは、吉井勇によって修正されたり削除されたりした箇所の原態を復元する試みである。誤記の訂正が多いが、歌題(見出し)を変更した箇所も一部あるほか、最終段階で削除された和歌を八首復元することができ。これらは頁数の都合で最終段階で削られたものであると思われる、自撰歌集の最終候補に残っていたものとして重要である。この吉井自身による修正は、上部に「●」を附した。

もう一つは、出版社(印刷所)によって書き込まれた活字の

大きさや文字間の指定である。上述した如く、刊行されなかった叢書であるから、実際にはどのような形で印刷される予定であったかを知る重要な手がかりである。これには、吉井自身の書き込みではないという意味で、上部に「※」を附した。

出典・異同では、『神杉』の和歌が最初に掲載された歌集名と、その頁、その歌集の本文との異同を掲出する。原稿で一度記された後、削除された歌についても同様に示した。『神杉』は既発表の和歌で構成された編纂歌集であり、すべての歌が先行歌集(一部に雑誌発表のものを含む)所収のものである。どの歌集から採取したかを明らかにして、その歌集との異同を掲出する。出典となった歌集は左のとおりである。

歌集『朝影』(墨水書房、昭和十八年一月)

歌集『霹靂』(一條書房、昭和十八年十一月)

歌集『玄冬』(創元社、昭和十九年三月)

「高志消息、新村出博士へ」(雑誌『高志』二巻五号所収、高志人社、昭和二十年五月)

異同の内容は、ごく一部が歌題(見出し)の変更と和歌本文の相違で、大部分がルビの相違である。吉井勇は、歌集を編纂するに当たって、全文を清書した後で、一日ないし数日をかけてルビを振るのを原則としている。自身の和歌や文字をどう読ませるかということに極めて意識的であった。従って、ルビの

相違もまた重要なものである。

一 翻刻

。原稿は三〇枚あり、用紙の上部に番号が振られている。
一枚目はナンバー「1」、二枚目はナンバー「4」とな
っている。ナンバー「2」「3」はない。
。各歌の上に、漢数字で歌順番号を示した。

■一枚目（ナンバー「1」）

決戦歌集神杉

吉井 勇

（後半面白紙）

二 注記

* 「決戦歌集」の「決戦」別筆。「決戦歌集」の右に「12
ポ四分」（赤鉛筆）と注記。12ポ活字四分アキの指定。

* 「神杉」の右に「2号全角」（赤鉛筆）、「ルビ6号」と
注記。2号活字全角アキ、ルビ6号活字の指定。

* 「吉井勇」の右に「3号」、左に「吉」「井」の間に
「全角」、「井」「勇」の間に「二倍」（すべて赤鉛筆）
と注記。「吉井勇」を3号活字、「吉井勇」の字間は全
角アキと二倍アキの指定。

* 「吉井勇」の左に「②（裏白）」（赤鉛筆）と注記。二
頁目の扉の裏側は白紙の指定。

■二枚目（ナンバー「4」）

大詔渙發

一 ますらをの涙はかかる時ながる大詔くだる今のただ今
二 あらた世のはじまる時ぞ十二月八日といへる日をな忘れそ
三 勝たむ勝たむかならず勝たむすめらぎの御稜威の下にわれ
ら戦ふ
四 寒き爐のほとりに額を伏せてぬ戦ひ宣らす大御言葉に
五 仰ぎ見よ大御戦宣らしたる朝の空の深き真澄みを
六 大詔いまか下りぬみたみわれ感極まりて泣くべくおもほゆ
七 神靈はわが上にありとたたかひを宣らす御言葉厳かしきか
も

* 二枚目原稿用紙右の欄外に以下の注記あり。「起三頁」
「本文9ポ字間二分アキ二十字詰折返し二行ぐみ」「行

間 一首の行間 五号全角」「歌と歌との行間 五号二倍アキ」。三頁目から本文、和歌本文は9ポ活字、文字間は二分アキ、一行文字数は二十字で機械的に折り返して二行に組む、和歌二行の行間は5号全角分を空ける、歌と歌との行間は5号活字二倍分空ける、の指定。

＊ 歌題「大詔渙發」の上に「三字下リ」、右に「12ポ（赤鉛筆）」「二分」、右下に「見出し12ポ 三字下リ一首分」と注記。重複しているが、「見出しは行頭から三字分下げて一首分（二行ドリ）」で12ポ活字で組む」との指定。文字間は二分アキとの指定。ただし、これは四字の見出しのもの。以下、歌題の文字数によって文字間を変える指示をしている。

● 歌題「大詔渙發」の下に「昭和十七年十二月八日」と細字で記した後に、すべて削除。

■三枚目（ナンバー「5」）

八 大詔聴きつつ思ふいまぞわれら大君のため死ぬべかりけれ
九 八隅知之わが大君のみことのり唱ふすなはち身ぬちすがしも

捷報來

一〇 世はとみにすがしきかなや眞珠灣のたたかひの朝水仙を剪る

一一 眞珠灣の爆撃の報を聴くときは狹庭の竹も鳴りか出づらめ

一二 みづから雷火となして敵を撃つ勇猛捨身何にたとへむ

一三 敵を撃ちすなはち爆ぜし記事讀めば寒き夜ながら掌には汗出づ

一四 神怒り雷火ひとたびとどろけば夷の艦はもろく沈みき

＊ 歌題「捷報來」の右に「12ポ二分」の注記。見出し三文字でも文字間は同じ。

■四枚目（ナンバー「6」）

一五 敵艦は百千に爆ぜて沈みきと今日のらじおの聴きのよろしき

一六 われらただひた往かむのみ正義の師今かとどろと出づるならずや

一七 皇軍に刃向ふ醜のえびすらは科戸の風とともにほろびよ

一八 ひむがしの亞細亞の空に茜さし神のみいくさいまか戦ふ國を思ふ

一九 國を思ふこころ切なるこの朝やひた祈るべう比叡にのほ

らむ

二〇 守るべき國土をおもふ爐の灰の冷えしごときはさもあら
ばあれ

二一 七十路の蘇峯も獅子吼したまへり國をおもへば黙し難け
む

* 歌題「國を思ふ」の右に「12ポ二分」の注記。

■五枚目（ナンバー「7」）

二二 國を思ふ心は人に劣らねどますらをなれば面に出さず

二三 ゆゆしき世ゆゆしき時の春に會ひて誰か毗上げて見ざら
む

二四 よしやわれ鬢白むとも國を思ふ強きこころに歌はつくら
な

防人の歌

二五 防人の與會布の歌はかしこしや千年ののちも人を起たし
む

二六 萬葉の防人の歌讀みつもますらを心なほ萎へずけり

二七 防人の心となればあらき世の磯觸り舟もやはか怖ぢめや
二八 わび居して歌はつくれどわれもまたわが大君の醜の御楯

ぞ

* 歌題「防人の歌」の右に「12ポ二分」の注記。

■六枚目（ナンバー「8」）

壬午新春

二九 堪へ堪へし胸の怒りもいま晴れてすがすがしもよ大きな
立つ

三〇 ひむがしの大き海越えひびき來る勝鬨とともに新年は來
ぬ

三一 國こぞり戦ふ大きな年明けて歌びとわれも心きほへり

三二 あたらしき年を祝ぐべき血まつりに夷奴は討ちも盡く
しね

三三 年だまの爆ぜだま受けし赤鬚の醜の泣き面目に見ゆるか
も

三四 ことごとく醜の夷を屠らねば止まじと誓ふ年のはじめに

三五 時ゆゆし年のはじめの言葉には莫妄想の三字えらばむ

* 歌題「壬午新春」の右に「12ポ二分」の注記。

■七枚目（ナンバー「9」）

三六 新年の爐の邊に半跏組みてあり心昂ぶりひたに堪へつつ
三七 國のため死なむ覺悟を極めて酌む豊酒の屠蘇冷たきもよし

三八 かくれ居のわびずみながら新年の勝いくさ年笑みて迎ふ
る

三九 すべて己がものにあらざと思ふとき家ぬち明るく年立ち
にけり

新雪抄

四〇 大東亞戦争起りたる年をいつか去年とし雪降りしきる
四一 とどろとどろ雪 雷も鳴り出でよくさある世に似ざる
しづけさ

四二 見てあれば今年の雪はいさざよしわれも大丈夫 歌をつ
くらむ

* 歌題「新雪抄」の右に「12ポ二分」の注記。

■八枚目（ナンバー「10」）

爐邊の歌

四三 いささかの炭繼ぎ足して爐邊に聴く夜のらじおに胸鳴り
やまず

四四 つたへ来るいくさの勝を爐邊に聴き目をうるますはうれ

四五 し涙か
夜ふかく爐の邊にありて思へらく紅毛づれに豈敗くべし
や

四六 たたかひに心きほへどやうやくに老の境のしづけさも知
る

四七 火の消えしつめたき爐邊の夜ふかく沈痛感にわれひたり
居り

四八 比叡風雪を吹き来る夜もふかく耳を澄ませば勝鬨聴こ
ゆ

四九 夜の十時戦況にゆうす聴き終り爐の火消ゆればやがて
寐むとす

* 歌題「爐邊の歌」の右に「12ポ二分」の注記。

■九枚目（ナンバー「11」）

曉闇端座

五〇 神よわが國守らせと思ふこころ曉闇なれば蓋し通はむ

五一 曉の寒さも知らでわれありぬ一念凝らしあればあるまま

五二 いっしんに思ひつむればはたた神飛ぶ姿さへ闇に見むと
す

五三 幾由句遠きかなたの勝鬨も聴こゆるものか朝のうつつ

に

五四 火もあらぬ爐の邊にありてこの朝や遠き呂宋のいくさ思はむ

軍神を思ふ

五五 九柱のみいくさ神にもの申すながく日本を守らせたまへ

* 歌題「曉闇端座」の右に「12ポ二分」の注記。

* 歌題「軍神を思ふ」の右に「12ポ四分」の注記。見出しが五文字なので文字間を詰める。

■一〇枚目（ナンバー「12」）

五六 ほほ笑みて人死なしむる日本の大_{だい}清_{しやう}淨_{じやう}の心よく見む

五七 寫_{しやう}眞_{しん}見て若_わさに泣_なかゆこのひと等_ら自_じ若_{じやく}と國_{こく}のために死にけり

五八 月の出の二分の後に撃_{うち}ちきとよその月魄_{つきしやく}をいかにかは見し

五九 さりげなく書き残したる絶筆_{ぜつぴつ}の一字_{いち}一字_{いち}に胸_{むね}を打_うたるる

六〇 われ知_しりて涙_{なみだ}落ちにきゆくものも送_{おく}るものもただに安_{やす}く笑_{わら}めるを

六一 月魄_{つきしやく}をしづかに見たる眉根_{まゆね}にもまさ_{まさ}にありけむ必_{ひつ}殺_{そつ}の氣_き

は

六二 常_{つね}のごと笑_{わら}ひてゆけるつはものの若_{わか}さを思_{おも}ふひとりしづかに

六三 おほかたは吾_あ子の年_{とし}ばへけなげにもかへりみなくて笑みて死_しにたる

■一一枚目（ナンバー「13」）

南洲遺訓

六四 南洲_{なんしゆう}の言葉_{ことば}を讀_よみてその大_{だい}き心_{こころ}に觸_ふれし樂_{がく}しさ_しに居_ゐり

六五 人言_{ひとこと}はこちたく寒_{ふせ}し天_{てん}をのみ頼_{たの}みて生_なきむみ言葉_{ことば}のごと

六六 己_しがものを捨_すて盡_{つく}くしたるいやはてのその樂_{がく}しさ_しを天_{てん}とやは言_いふ

比叡山

六七 あめつちに蕭_{しやう}殺_{くさつ}の氣_きの滿_みつるときいよ嚴_{きび}しく比叡_{ひえ}を立_たたしめ

六八 このごろや比叡_{やまかた}の山肩_{さんかた}いよ鋭_とくたたかひにのみ心凝_こらしむ

六九 比叡_{ひえ}を見て遠_{とほ}くたたかふ人思_もへば眉_{まゆ}こそあがれ雷_{らい}も鳴_なるがに

* 歌題「南洲遺訓」の右に「12ポ二分」の注記。

* 歌題「比叡山」の右に「12ポ二分」の注記。

■二枚目（ナンバー「14」）

七〇 比叡^{きび}厳^{きび}しこのごろ道に往きあへる大学生に^{だいがくせい}撓^{たわ}髪^{がみ}もなし

七一 比叡^{きび}すでに殺氣^{さつき}を帯びぬ仰ぎ見て二天^{にてん}の劍^{けん}を思ふころかな

七二 たたかひの勝^いを祈^{いの}れる大護摩^{おほごま}の煙のごとき比叡^{きび}の雲見む

七三 比叡^{きび}はかく嚴^{きび}しき面^{おも}をして立つや十億劫^{じゅうおくしやく}の昔よりなほ

友と語る

七四 あきつ神大君にのみつなされるひとすち心友いしく言ふ

七五 みづからの寒微^{かんび}歎かずひたすらに國を語れりよきかな友

や

七六 薩摩^{さつま}濁祖^{がた}父^お生れし土の香^かをおもひつつ聴く友の言葉を

* 歌題「友と語る」の右に「12ポ二分」の注記。

■三枚目（ナンバー「15」）

一月八日

七七 あなかしこ去年^{こぞ}の師走^{しはす}のこの夜あけ朝^{あさ}まだきより歴史^{れきし}變^{かは}

りぬ

七八 大詔^{みことのり}くだりし朝の感激^{かんしき}をわれふたたびす空を仰ぎて

七九 今日^{けふ}はひと日^{いちにち}大^{おほ}き歴史^{れきし}の上^{うへ}に見るこの深遠^{しんまん}を思ひこらむ

（後半面すべて削除）

● 「大詔奉戴」を削除し、右に歌題「一月八日」を記す。

* 歌題「一月八日」の右に「12ポ二分」の注記。

● 七九番歌の次、以下、後半面の歌・歌題、すべて削除

（削除1・削除2・削除3の歌）。

古机窓邊に据ゑてかの朝のおもひ書かむとちび筆を

呵す

押川春浪を思ふ

夷等をいまことむくる時の來て友の武俠を思ふころ

かな

友や亡し杯あげてよく説きし南進論は耳にあれども

■四枚目（ナンバー「16」）

八〇 古机窓邊に据ゑてかの朝のおもひ書かむとちび筆^かを呵^か

す

こころ足る

八一 はだらはだら髪^{かみ}白^{しろ}めばか慷慨^{かうがい}の歌もつくらずわがこころ

足る

八二 夜ふかく祖國そこくのよさを書きし文讀み耽りつつわがこころ足る

八三 はるけくも唐天竺からてんじくに伸びてゆく國つ力にわがこころ足る

八四 祖父が國をおもへる歌書きし短冊たんざくを見てわがこころ足る

八五 胡麻ごまあへの菊菜きくなうましと食うべては夕餼ゆふげ樂しくわがこころ足る

八六 いきどほろしきこと思ふ日も遠天そくてんの雷いかづち聴けばわがこころ足る

* 歌題「こころ足る」の右に「12ポ四分」の注記。

■一五枚目（ナンバー「17」）

明治神宮

八七 をろがみぬいまは神としようち仰ぐ明治めいしの大き帝みかどおもひて

八八 神にちかきけはひ覺ゆるしづけさに砂利踏じやりふむ足の音もつ
つしむ

八九 神かみの森木立もりこだちの奥の池ちかき隔雲亭かくうんでいのありどころかな

祖先の墓

九〇 青山あおやまの墓原道はからみちを往きにけり生きてある身のむしろ寂しく

九一 目を閉ぢてみ墓の前にうづくまり遠とほつ御祖みおやのたましひに

觸る

九二 おん墓の石を撫で居をりをさなくて抱だかれし父ちちの腕うでとおもひて

* 歌題「明治神宮」の右に「12ポ二分」の注記。

* 歌題「祖先の墓」の右に「12ポ二分」の注記。

一六枚目（ナンバー「18」）

九三 御祖神みおやがみに祈るらくあはれひとすぢの清さをわれの胸にあらしめ

九四 青山あおやまのしづけき丘をかの墓群はかむらのなかにまじりて眠らむは何時いづ

神武天皇祭

九五 たたかひに召されて征ゆきしわが友は神武じんむの祭いづこにてする

九六 家のうち清きよめすがしみかしこみて神武の昔思ひまつりぬ

九七 たたかひの中にあれどもかしこしや神武の祭この日したまふ

南方の友へ

九八 みむなみの呂宋るそんの島を平ならげてみいくさの威あや日のぼる
如ごとし

* 歌題「神武天皇祭」の右に「12ポ四分」の注記。

* 歌題「南方の友へ」の右に「12ポ四分」の注記。

■一七枚目（ナンバー「19」）

九九 比律賓太守のごとく眉をあげ肩聳やかし友はあるらむ

一〇〇 いそのかみ古る駒形の鱈汁思ひ出でつつ月見るらむ

か

豆腐の歌

一〇一 いにしへの比叡の聖も愛でましし豆腐と思ひわれも愛

づらく

一〇二 しらじらとものを思へる皿の上の豆腐法師にもな問

ひそね

一〇三 豆腐腹ゆふべ撫でつつおもへらく日本のちからこよ

りぞ湧く

一〇四 白川の葱をまじへし豆腐汁二椀を換へて足るころか

な

一〇五 わが箸の觸るればあなや崩れけり豆腐は時にはかな

るもの

* 歌題「豆腐の歌」の右に「12ポ二分」の注記。

■一八枚目（ナンバー「20」）

熱田鳴神

一〇六 さながらに神代のごとしみいくさは熱田鳴神島ふたつ

生む

一〇七 北海の鳴神島に神の兵いまかのぼれり夏来るらしも

一〇八 熱田島鳴神島に消え残る雪の白さもおもひ見るべし

一〇九 神の兵蹶えはららかし進むなり鳴神島の六月の雪

一一〇 北海の鳴神島の空に鳴る雷に似し雷鳴りて梅雨明く

祖父を思ふ

一一一 病める目にまさしく見るは祖父の頬髭なれや泣くべく

思ほゆ

* 歌題「熱田鳴神」の右に「12ポ二分」の注記。

* 歌題「祖父を思ふ」の右に「12ポ四分」の注記。

■一九枚目（ナンバー「21」）

一二二 國のため吾にも起てとか病みてなほ祖父を見る夢ただ

ならず

一二三 かくばかりやさしく笑ます祖父の面輪消えなば寂しか

らむか

一二四 祖父の面かけを見て苦しけど命のはてといまを思はず

一一五 病ひかならず癒えむとかすかのたまはす祖父の目のや
さしきことよ

一一六 おほちちの戊辰のころの胸痛み心いたみを思ひつつぞ
病む

一一七 傍にまさしく祖父いますぞと思へば脈も静まりゆきぬ
かたはら

一一八 夢うつさだかにわかね祖父の唇うごきもの言ふごと
し

一一九 祖父はすでにいままさず目覺むればはや曉となりたるら
しも

■二〇枚目(ナンバー「22」)

山本元帥を悼む

一二〇 午后三時思ひがけなく聴くこゑは霹靂なして胸を打つ
もの

一二一 いさぎよき死やと思へどおのづから唇を噛ましむ泣
くらむか

一二二 たたかひは厳し提督身みづから敵に當りて死なさせた
まふ

一二三 國のため君は死にきと思へども言ひ甲斐なしや眼うる
み來

一二四 新聞を見ればなつかし越の友御風がかたる提督の歌

一二五 五十六はここに死すとも神となりて國を守らむと蓋し
言ひけむ

一二六 かの雲の遠にて君は死なしけむ雲もかなしと思ひ雲見
る

* 歌題「山本元帥を悼む」「12ポベタ」の注記。文字数
が多いのでベタ組み。

■二一枚目(ナンバー「23」)

たたかひ

一二七 たたかひを思へば厳し窓の外の比叡も山肩あげにたら
ずや

一二八 たたかひを身近におぼえ目閉づれば半夏の空に雷も鳴
るらし

一二九 たたかひはいまかたけなは比叡山のあたりの雷も起て
よとぞ鳴る

一三〇 たたかひの歌を書かむと取り出せしその硯さへ雷曇り
せる

一三一 たたかひの勝を祈るべく夏行僧比叡にこもらむ時は
來むかふ

一三二 たたかひは日ごと厳しくなりて來ぬ腕組み思へば老も

忘るる

一三三 たたかひを思ふ心の極まれば今年はわれに夏安居もなし

* 歌題「たたかひ」の右に「12ポ二分」の注記。

■二三枚目（ナンバー「24」）

微臣謹詠

一三四 御祖神ををろがみたまふ現津神をさらにをろがみかし

こむ吾は

一三五 大君の祈りかしこし今日よりは伊勢神垣に霜降るなゆ

め

一三六 ありがたく畏く世にもたぐひなき行幸のあとに額伏せ

まつる

一三七 すめらぎの伊勢へ行幸の御輦のとどろく音ぞかしこ

みて聴け

一三八 御祖神のまへにみづから祈りたまふ大御心を思へば泣

かるる

伊勢の神宮

一三九 一歩一歩足もすくみてゆく思ひ高倉山の山ちかみかも

* 歌題「微臣謹詠」の右に「12ポ二分」の注記。

* 歌題「伊勢の神宮」の右に「12ポ四分」の注記。

■二三枚目（ナンバー「25」）

一四〇 勾玉の池のま近く來し時にふとにほひ來しものの香や

何

一四一 いざや身を淨め祈らむと蕃堀のかたはらに置く古帽子

かも

一四二 神杉の雫に濡れてゆくほどに身ぬち澄み來てわれあら

ずけり

一四三 坂十佛書ける參宮記のなかの五百枝の杉の大幹ぞこ

れ

一四四 靴の音立つれどかしこ楠の根の神の鶏白くうごかず

一四五 身に迫り心を打つは何ならむ千木堅魚木を仰ぎ見ると

き

一四六 額づけば頬にかそけく觸るるものこれや遠世の神の息

吹か

一四七 いぢらしや鶏冠眞紅の神鶏も道ゆきずりに呼べば馴寄

り來

■二四枚目（ナンバー「26」）

籠居述懷

一四八 進みゆく軍のきほひを感じつつ朝目覺めて比叡風聴く
一四九 かしこしや兵の姿に身をかりて八百萬神たたかひた

まふ

一五〇 曉に起きてひたすら黙し禱ることはいくさのほかにあ

らむや

一五一 たたかひの知らせを聴けば胸ぬちに澄むもののおほゆ神
明の氣か

蟲聲唧々

一五二 曉のいとど切なる蟲の音は悲願を持ちて聴くべかり

けり

一五三 命かけて一途に鳴ける蟲の音に耳かたむけてもの思ふ
や誰

* 歌題「籠居述懷」の右に「12ポ二分」の注記。

● 「印 撃滅」を削除し、下に歌題「蟲聲唧々」を記す。

* 歌題「蟲聲唧々」の右に「12ポ二分」の注記。

* 上部欄外に「唧々」（丸囲み）。正確な字体を示す。

■二五枚目（ナンバー「27」）

一五四 聳やかす肩も瘦せぬと思ひつつ蟲の音聴けば寂しくも

あるか

一五五 莊嚴の國土に生ふる草の蔭ちちろと鳴ける蟲を愛し
む

印度を思ふ

一五六 三億の民ことごとく死もて起てさらば勝たむと足ずり

て居る

一五七 食を斷つよりほかあらがふ術もなき印度聖をかなし
みにけり

一五八 佛陀ここに生まれし日のしづけさに印度の民をかへ
させたまへ

一五九 血に染みし地を守る心極まれば恒河の砂も食みぬべき
かな

一六〇 今にして道龍法師思はるとひとりつぶやく夕庭を見
て

* 歌題「印度を思ふ」の右に「12ポ四分」の注記。

■二六枚目（ナンバー「28」）

（前半面すべて削除）

再び爐邊の歌

一六一 やうやくに心厳しくなりにけり火のなき爐邊に腕組み居れば

一六二 厳しきは寒さかあらず身に迫る夜氣か否とよ胸ぬちのこゑ

一六三 夜ふかく玻璃戸を徹す霜の冴えこころの冴えはすでに久しも

● 前半面の以下の歌題・歌、すべて削除（削除4・削除5・削除6の歌）。

白禱原をとめ

爐のほとり古事記の昔思ふほど心すがしきひとときはなし

遠つ代のものがたりまでいしく書く大鹿卓の眼鏡おも

ほゆ

まごころの尊きことはいにしへも今も變らず白禱原をとめ

* 歌題「再び爐邊の歌」の右に「12ポ四分」の注記。

■二七枚目（ナンバー「29」）

一六四 たたかへる人を思へば夜を爐邊に在るもかしこき己が身とぞする

一六五 身も氷れ心も氷れ爐の灰も氷れとぞおもふたたかひ思へば

一六六 爐邊にゐて眼を閉づること幾度何の祈念に過ぐる時ぞも

一六七 寒き膝撫でつつ居れば畫園のはげしき歌も胸にうかび來

一六八 夜ふかく心たぎちに堪へてゐぬ筆も劍になさんずおもひ

一六九 神々のたたかひたまふみ姿をわれ爐邊にゐて遠くおもはむ

擊滅

一七〇 比叡が嶺の雪の厳しさ仰ぎつつひた撃ちごころいまだゆるまず

* 歌題「撃滅」の右に「12ポ全角」の注記。文字数が少ないので全角アキ。

■二八枚目（ナンバー「30」）

一七一 ひた撃たむこころを持ちて聴くときはいやすさまじき寒雷の音

一七二 ひた撃ちに撃たむとちかふ今日の來て狹庭の石も鳴り

か出づべき

十二月八日

一七三 十二月八日の朝のすがしさをいまだ忘れず比叡の空見
る

一七四 その日より肩聳やかす癖つきぬ國こぞり起つ心きほひ
に

一七五 みことのりくだるすなはち海のうへ霹靂鳴れりすがし
きかなや

一七六 世はここに大きく變る十二月八日の朝の空のゆゆしさ
一七七 その朝の大みことのり嚴として思ひ出すたび胸をふる
はす

* 歌題「十二月八日」の右に「12ポ四分」の注記。

■二九枚目（ナンバー「31」）

一七八 大東亞戦争起りたる年はすでに去年かも時はやきかも
一七九 その日よりわび居の庭の石に降る霜の聲さへ冴えにた
らずや

一八〇 その朝のすがすがしさはわが庭の竹に聴くべし石に聴
くべし

一八一 一年はいつしか過ぎぬ眞珠灣を撃ちし朝の水仙の花

一八二 眞珠灣のいくさの知らせ聴きし朝の胸とどろきを忘れ
じとこそ

一八三 みことのり聴きて目潤み身震へし朝も昨日のごとしと
思へや

閑居雜詠

一八四 たたかひの世も夢殿の觀音は笑みいますらむ春をし
づけく

● 一八〇番歌の後、次の歌一首削除（削除7の歌）。

この大き戦さを知らずい逝きたる土佐の酒麻呂思へば
かなしも

* 歌題「閑居雜詠」の右に「12ポ二分」の注記。

■三〇枚目（ナンバー「32」）

一八五 ひたむきに戦さにごころゆく朝は鵲の聲もいや冴えに
けり

一八六 この驚ひたむきなれや聲遠くたたかふ人に聴かせてむ
もの

一八七 ひたぶるの鋭心持ちて焼くときは鹽の鰯の干魚もか
しこし

巻後に

一八八 われすでに鬢^{びんしら}白^{しろ}めども三越路^{みこしち}の中つ國邊^{くにべ}にやはか老い
めや

昭和乙酉仲夏越中國八尾町客寓にて

吉井 勇

三 出典・異同

* 左欄外に「60白」「白」丸囲み。

* 一八七番歌の後、「58白」「白」丸囲みの注記、58
頁は白紙の指定。

* 「巻後に」の上に「二字下り」、右に「12ポ二分アキ」。
下部欄外に丸囲み数字「59」。

* 一八八番歌の右に「12ポ四分アキ 十八字詰二行全角
アキ」の注記。本文中の和歌よりも大きい活字で組む
ことの指定。

● 一八八番歌の後、次の歌一首削除（削除8の歌）。
國^{おも}を思ふ身を三越路^{みやう}にわび寐^ねして京^{きやう}へかへらむ時をこ
そ待て

* 一八八番歌の前後を一行分空ける指示あり。

* 「昭和乙酉仲夏越中國八尾町客寓にて」の右に「8ポ
ベタ」の注記。

* 「吉井勇」の右に「12ポ」、左に「吉」「井」の間に
「全角アキ」、「井」「勇」の間に「二倍アキ」の注記。

。『神杉』における歌題（見出し）に▼を附して、歌群の
前に示した。削除された歌題には▽を附した

。翻刻と対応した『神杉』の歌順番号（漢数字）、出典の
歌集、歌題（見出し）、出典における所在頁（算用数字）
の順に示す。

。削除された歌についても、原稿のままの順序で掲出し
た。削除歌は「削除1」「削除2」などとし、「削除8」
まである。

。異同がある場合、「○神杉本文―出典本文」という形式
で示す。

。異同で、○は振り仮名や漢字・仮名など表記のみが異な
るもの、◎は語（意味）が異なるものである。

▼『神杉』大詔渙發（一〜九）

一 『霹靂』大詔渙發 8 ○時ながる―時流る

二 『霹靂』大詔渙發 8

- 三『霹靂』大詔渙發 7
四『朝影』御民吾、大詔を拜す 121
五『朝影』御民吾、大詔を拜す 121
六『朝影』御民吾、大詔を拜す 122
七『朝影』御民吾、大詔を拜す 122
○宣らす御言葉—宣らす御言葉
八『朝影』御民吾、大詔を拜す 122
九『朝影』御民吾、大詔を拜す 123 ○みことのり—大詔
▼『神杉』捷報來（二〇〜一八）
一〇『朝影』御民吾、捷報來 126
一一『朝影』御民吾、捷報來 124 ○眞珠灣の—眞珠灣
○爆撃の報を—爆撃の報 ○聴くときは—きたる朝
一二『朝影』御民吾、捷報來 126
一三『朝影』御民吾、捷報來 126 ○敵を撃ち—敵を撃ち
一四『霹靂』馬來沖海戦 11 ○雷火ひとたび—雷火ひとたび
○夷の艦は—夷の艦は
一五『霹靂』馬來沖海戦 11 ○敵艦は—敵艦は
○聴きのよろしき—聴きのよろしき
一六『霹靂』正義の師 14 ○われらただ—われ等ただ
一七『霹靂』正義の師 14 ○えびすらは—夷らは
○科戸の風と—科戸の風と
一八『霹靂』正義の師 14
▼『神杉』國を思ふ（一九〜二四）
一九『朝影』御民吾、國を思ふ 117 ○この朝や—この朝や
○ひた祈るべう—ひた祈るべう
○比叡にのぼらむ—比叡にのぼらむ
二〇『朝影』御民吾、國を思ふ 120 ○守るべき—守るべき
○國土をおもふ—國土を思ふ
二一『朝影』御民吾、國を思ふ 118 ○蘇峯も獅子吼—蘇峯も獅子吼
○國をおもへば—國を思へば
二二『朝影』御民吾、國を思ふ 119 ○國を思ふ—國をおもふ
○ますらをなれば—益荒夫なれば
○面に出さず—面に出さず
二三『朝影』御民吾、國を思ふ 118
二四『朝影』御民吾、國を思ふ 120 ○國を思ふ—國をおもふ
○強きところに—強き心に
○歌はつくらな—歌はつくらむ
▼『神杉』防人の歌（二五〜二八）
二五『霹靂』防人の歌 15 ○人を起たしむ—人を起たしむ
二六『霹靂』防人の歌 16 ○防人の歌—防人の歌
二七『霹靂』防人の歌 16 ○防人の—防人の ○磯觸り舟も
—磯觸り舟も ○やはか怖ぢめや—いかで怖ぢめや

- 二八 『霹靂』防人の歌 15 ○醜の御楯ぞ—醜の御盾ぞ
- ▼『神杉』壬午新春（二一九〜三九）
- 二九 『朝影』御民吾、壬午新春 130
- 三〇 『朝影』御民吾、壬午新春 131
- 新年は来ぬ—新年は来ぬ
- 三一 『朝影』御民吾、壬午新春 131
- 戦ふ大—戦ふ大
- 三二 『朝影』御民吾、壬午新春 132 ○年を祝ぐべき—年を祝ぐべき ○討ちも盡くしね—討ちも盡くしね
- 三三 『朝影』御民吾、壬午新春 133
- 醜の泣き面—醜の泣き面
- 三四 『朝影』御民吾、壬午新春 133 ○醜の夷を—醜の夷を
- 屠らねば—屠らねば
- 三五 『朝影』御民吾、壬午新春 134
- 三字えらばむ—三字選ばむ
- 三六 『朝影』御民吾、壬午新春 134
- ※ 第四句「心昂ぶり」の「昂」は「昂」の異体字。原稿・
- 『朝影』ともに同じ字体。
- 三七 『朝影』御民吾、壬午新春 135
- ◎國のため—國のために
- 三八 『朝影』御民吾、壬午新春 133 ○かくれ居の—かくれ
- 居の ○勝いくさ年—勝いくさ年
- 三九 『朝影』御民吾、壬午新春 135
- ▼『神杉』新雪抄（四〇〜四二）
- 四〇 『霹靂』新年の雪 27 ○戦争起り—戦争起り
- 四一 『霹靂』新年の雪 27
- 四二 『霹靂』新年の雪 28
- ▼『神杉』爐邊の歌（四三〜四九）
- 四三 『朝影』御民吾、爐邊の歌 136
- 炭繼ぎ足して—炭繼ぎ足して
- 四四 『朝影』御民吾、爐邊の歌 138
- 爐邊に聴き—爐邊に聴き
- 四五 『朝影』御民吾、爐邊の歌 138 ○夜ふかく—夜ふかく
- 爐の邊にありて—爐の邊にありて
- 四六 『朝影』御民吾、爐邊の歌 139
- 四七 『朝影』御民吾、爐邊の歌 139
- 四八 『霹靂』香港陥落 22
- 四九 『朝影』御民吾、爐邊の歌 138 ○夜の十時—夜の十時
- ▼『神杉』曉闇端座（五〇〜五四）
- 五〇 『朝影』御民吾、曉闇端座 142
- ◎思ふこころ—祈るこころ
- 五一 『朝影』御民吾、曉闇端座 143

- 五二 『朝影』 御民吾、曉闇端座 143 ○はたた神—はたた神^{かみ}
- 五三 『朝影』 御民吾、曉闇端座 143
- 五四 『朝影』 御民吾、曉闇端座 144
- 爐^ろの邊^へにありて—爐の邊にありて
- ▼『神杉』軍神を思ふ（五五〜六三）
- 五五 『朝影』 御民吾、軍神を思ふ 145
- みいくさ神に—みいくさ神^{かみ}に
- 五六 『朝影』 御民吾、軍神を思ふ 146
- 五七 『朝影』 御民吾、軍神を思ふ 146
- 若^{わか}さに泣かゆ—若さに泣かゆ
- 五八 『朝影』 御民吾、軍神を思ふ 146
- 撃ちきとよ—撃ちきとよ
- 五九 『朝影』 御民吾、軍神を思ふ 147 ○絶筆^{ぜつぴつ}の—絶筆の
- 六〇 『玄冬』 聖戦抄、九軍神を思ふ 110
- 安^{やす}く笑^あめるを—安く笑めるを
- 六一 『玄冬』 聖戦抄、九軍神を思ふ 111
- 必殺^{ひつさつ}の氣は—必殺の氣は
- 六二 『玄冬』 聖戦抄、九軍神を思ふ 111 ○常^{つね}のごと—常のごと
- 笑^{わら}ひてゆける—笑ひてゆける
- 六三 『玄冬』 聖戦抄、九軍神を思ふ 111
- 吾子^{あこ}の年^{とし}ばへ—吾子^{あこ}の年^{とし}ばへ
- ▼『神杉』南洲遺訓（六四〜六六）
- 六四 『霹靂』 南洲遺訓 63
- 六五 『霹靂』 南洲遺訓 63 ○頼^{たの}みて生きむ—頼みて生きむ
- 六六 『霹靂』 南洲遺訓 64
- 捨て盡^すくしたる—棄^すて盡^{つく}したる
- ▼『神杉』比叡山（六七〜七三）
- 六七 『朝影』 比叡懺法、山氣蕭殺 9 ○蕭殺^{しやうさつ}の氣^きの—蕭殺^{しやうさつ}の氣^きの
- 比叡^{ひゑ}を立たしめ—比叡を立たしめ
- 六八 『朝影』 比叡懺法、山氣蕭殺 9
- 比叡^{ひゑ}の山肩^{やまかた}—比叡の山肩
- ※ 出典の字体は「肩」で、「肩」ではない。
- 六九 『朝影』 比叡懺法、山氣蕭殺 10
- 眉^{まゆ}こそあがれ—眉こそ昂^あがれ
- 七〇 『朝影』 比叡懺法、山氣蕭殺 10 ○大學生^{だいがくせい}に—大學生に
- 七一 『朝影』 比叡懺法、山氣蕭殺 11
- 七二 『朝影』 比叡懺法、山氣蕭殺 11
- 勝^{いの}を祈^{いの}れる—勝を祈れる
- 七三 『朝影』 比叡懺法、山氣蕭殺 11 ○比叡^{ひゑ}はかく—比叡^{ひゑ}
- かく ○嚴^{きび}しき面^{おも}を—嚴しき面^{おも}を
- ▼『神杉』友と語る（七四〜七六）

- 七四『霹靂』心の友 31 ○あきつ神—あきつ神
○友いしく言ふ—友いしく言ふ
- 七五『霹靂』心の友 31 ○寒微歎かず—寒微歎かず
七六『霹靂』心の友 32 ○祖父生れし—おほ父生れし
○土の香を—土の香を
○おもひつつ聴く—思ひつつ聴く
- ▼『神杉』一月八日(七七〜七九、削除1)
七七『霹靂』大詔奉戴 33 ○歴史變りぬ—歴史變りぬ
七八『霹靂』大詔奉戴 33 ○大詔—大詔り
七九『霹靂』大詔奉戴 34 ○大詔奉戴の—大詔奉戴の
削除1『霹靂』大詔奉戴 31 ○古机—古机 ○窓邊に据ゑ
て—窓邊に据ゑて ○ちび筆を呵す—ちび筆を呵す
- ▽『神杉』押川春浪を思ふ(削除2、削除3)
削除2『霹靂』春浪を思ふ 35
○夷等を—夷等を ○友の武俠を—友の武俠を
- 削除3『霹靂』春浪を思ふ 35 ○友や亡し—友や亡し
○南進論は—南進論は
- ▼『神杉』一月八日(八〇) *七九から続く。
八〇『霹靂』大詔奉戴 34 ○ちび筆を呵す—ちび筆を呵す
▼『神杉』ころる足る(八一〜八六)
八一『朝影』洛北籠居、ころる足る 43
- 八二『朝影』洛北籠居、ころる足る 44
八三『朝影』洛北籠居、ころる足る 48
八四『朝影』洛北籠居、ころる足る 50
○短冊を見て—短冊を見て
八五『朝影』洛北籠居、ころる足る 52 ○胡麻あへの—胡
麻あへの ○夕餽樂しく—夕餽樂しく
八六『朝影』洛北籠居、ころる足る 46
○こと思ふ日も—こと思ふ日も
- ▼『神杉』明治神宮(八七〜八九)
八七『霹靂』明治神宮 92
八八『霹靂』明治神宮 91 ○神にちかき—神に近き
○けはひ覺ゆる—けはひおぼゆる
○音もつつしむ—音もつつしむ
- 八九『霹靂』明治神宮 92 ○木立の奥の—木立の奥の
▼『神杉』祖先の墓(九〇〜九四)
九〇『霹靂』祖先の墓 93
九一『霹靂』祖先の墓 93
○たましひに觸る—たましひに觸る
九二『霹靂』祖先の墓 94 ○抱かれし父の—抱かれし父の
○腕とおもひて—腕と思ひて
九三『霹靂』祖先の墓 94

九四 『霹靂』祖先の墓 94

○なかにまじりて—なかにまぢりて

▼『神杉』神武天皇祭（九五〜九七）

九五 『霹靂』神武天皇祭 101 ○神武の祭—神武の祭

九六 『霹靂』神武天皇祭 101 ○神武の昔—神武の昔

九七 『霹靂』神武天皇祭 102 ○神武の祭—神武の祭

▼『神杉』南方の友へ（九八〜一〇〇）

九八 『霹靂』南方の友 107 ○日のぼる如し—日のぼるごとし

九九 『霹靂』南方の友 108

一〇〇 『霹靂』南方の友 108 ○鱈汁—鱈汁

▼『神杉』豆腐の歌（一〇一〜一〇五）

一〇一 『霹靂』豆腐の歌 139 ○比叡の聖もひ—比叡の聖も

○愛でましし—愛でましし

○豆腐と思ひ—豆腐と思ひ

一〇二 『霹靂』豆腐の歌 139

一〇三 『霹靂』豆腐の歌 140

一〇四 『霹靂』豆腐の歌 140

◎二椀を換へて—二杯を換へて

一〇五 『霹靂』豆腐の歌 140

▼『神杉』熱田鳴神（一〇六〜一一〇）

一〇六 『霹靂』熱田鳴神 161 ○熱田鳴神—鳴神熱田

○島ふたつ生む—島ふたつ生む

一〇七 『霹靂』熱田鳴神 161 ○鳴神島に—鳴神島に

○夏来るらしも—夏来るらしも

一〇八 『霹靂』熱田鳴神 162 ○熱田島—熱田島 ○鳴神島

に—鳴神島に ○消え残る—消え残る ○おもひ見

るべし—思ひ見るべし

一〇九 『霹靂』熱田鳴神 162 ○神の兵—神の兵

○進むなり—進むなり ○六月の雪—六月の雪

一一〇 『霹靂』熱田鳴神 162 ○北海の—北海の

○空に鳴る—空に鳴る

▼『神杉』祖父を思ふ（一一一〜一一九）

一一一 『玄冬』病床沈吟、祖父を思ふ 183

○頬髭なれや—頬髭なれや

一一二 『玄冬』病床沈吟、祖父を思ふ 183

一一三 『玄冬』病床沈吟、祖父を思ふ 174

○やさしく笑ます—やさしく笑ます

一一四 『玄冬』病床沈吟、祖父を思ふ 184 ○祖父の—祖父の

○面かげを見て—面かげを見て

一一五 『玄冬』病床沈吟、祖父を思ふ 184

○癒えむとかすか—癒えむとかすか

一一六 『玄冬』病床沈吟、祖父を思ふ 185

○思ひつつぞ病む—思ひつつぞ病む

一一七 『玄冬』 病床沈吟、祖父を思ふ 185

○思へば脈も—思へば脈も

一一八 『玄冬』 病床沈吟、祖父を思ふ 185 ○祖父の—祖父の

○唇うごき—唇うごき

一九 『玄冬』 病床沈吟、祖父を思ふ 186 ○祖父は—祖父は

▼『神杉』 山本元帥を悼む (一二〇—一二六)

一二〇 『玄冬』 聖戦抄、山本元帥を悼む 135

○午后三時—午後三時 ○聴くこゑは—聴く聲は

○霹靂なして—霹靂なして

一二一 『玄冬』 聖戦抄、山本元帥を悼む 136

○唇を噛ましむ—唇を噛ましむ

一二二 『玄冬』 聖戦抄、山本元帥を悼む 136

○敵に當りて—敵に當りて

一二三 『玄冬』 聖戦抄、山本元帥を悼む 136

一二四 『玄冬』 聖戦抄、山本元帥を悼む 137

○新聞を—新聞を ○越の友—越の友

一二五 『玄冬』 聖戦抄、山本元帥を悼む 139

○五十六は—五十六は

※ 結句「蓋し言ひけむ」の「蓋」は、原稿・『玄冬』と

もに「蓋」の字体。「蓋」は「蓋」の異体字。

一二六 『玄冬』 聖戦抄、山本元帥を悼む 139

○思ひ雲見る—思ひ空見る

▼『神杉』 たたかひ (一二七—一三三)

一二七 『玄冬』 聖戦抄、たたかひ 107

○思へば嚴し—思へば嚴し

一二八 『玄冬』 聖戦抄、たたかひ 107

一二九 『玄冬』 聖戦抄、たたかひ 108

○いまかたけなは—今かたけなは

一三〇 『玄冬』 聖戦抄、たたかひ 108

一三一 『玄冬』 聖戦抄、たたかひ 108

一三二 『玄冬』 聖戦抄、たたかひ 109 ○腕組み思へば—腕

組み思へば ○老も忘るる—老も忘るる

一三三 『玄冬』 聖戦抄、たたかひ 109 ○極まれば—極まれば

○今年はわれに—今年はわれに

▼『神杉』 微臣謹詠 (一三四—一三八)

一三四 『玄冬』 聖戦抄、微臣謹詠 112 ○現津神を—現津神を

一三五 『玄冬』 聖戦抄、微臣謹詠 112

○祈りかしこし—祈りかしこし

一三六 『玄冬』 聖戦抄、微臣謹詠 113

○額伏せまつる—額伏せまつる

一三七 『玄冬』 聖戦抄、微臣謹詠 113

○とどろく音ぞ—とどろく音ぞ

一三八 『玄冬』 聖戦抄、微臣謹詠 113 ○御祖神の—御祖神の

▼『神杉』 伊勢の神宮（一三九—一四七）

一三九 『玄冬』 神樂歌、伊勢の神宮 153

○一步—一步—一步 ○高倉山の—高倉山の

一四〇 『玄冬』 神樂歌、伊勢の神宮 153 ○ふとにほひ来し

—ふと匂ひ来し ○ものの香や何—ものの香や何

一四一 『玄冬』 神樂歌、伊勢の神宮 154 ○浄め祈らむと—

浄め祈らむと ○古帽子かも—古帽子かも

一四二 『玄冬』 神樂歌、伊勢の神宮 155

一四三 『玄冬』 神樂歌、伊勢の神宮 155 ○坂十佛—坂十佛

一四四 『玄冬』 神樂歌、伊勢の神宮 156 ○靴の音—靴の音

○楠の根の—楠の根の ○神の鶏—神の鶏

一四五 『玄冬』 神樂歌、伊勢の神宮 157

一四六 『玄冬』 神樂歌、伊勢の神宮 158 ○頬にかそけく—

頬にかそけくも ○これや遠世の—これや遠世の

一四七 『玄冬』 神樂歌、伊勢の神宮 158

▼『神杉』 籠居述懐（一四八—一五一）

一四八 『玄冬』 聖戦抄、籠居述懐 118 ○感じつつ—感じつつ

一四九 『玄冬』 聖戦抄、籠居述懐 119

○八百萬神—八百萬神

一五〇 『玄冬』 聖戦抄、籠居述懐 119

○ほかにあらむや—外にあらむや

一五一 『玄冬』 聖戦抄、籠居述懐 119

○神明の氣か—神明の氣か

▼『神杉』 蟲聲唧々（一五二—一五五）

一五二 『霹靂』 蟲聲唧々 215

一五三 『霹靂』 蟲聲唧々 215

一五四 『霹靂』 蟲聲唧々 216

○蟲の音聽けば—蟲の音聽けば

一五五 『霹靂』 蟲聲唧々 216

▼『神杉』 印度を思ふ（一五六—一六〇）

一五六 『霹靂』 印度を思ふ 211 ○民ごとごとく—民ごとく

とく ○死もて起て—死もて起て

一五七 『霹靂』 印度を思ふ 211

一五八 『霹靂』 印度を思ふ 212 ○印度の民を—印度の民を

一五九 『霹靂』 印度を思ふ 212 ○血に染みし—血に染みし

○地を守る心—地を守る心 ○極まれば—極まれば

一六〇 『霹靂』 天竺路次所見 214 ○道龍法師—道龍法師

○思はると—思はると

▽『神杉』 白禱原をとめ（削除4—削除6）

削除4 『霹靂』 白禱原をとめ 255 ○古事記の昔—古事記の昔

○思ふほど—思ふほど

削除5 『霹靂』 白禱原をとめ 255 ○遠つ代の—遠つ代の

○大鹿卓の—大鹿卓の

○眼鏡おもほゆ—眼鏡おもほゆ

削除6 『霹靂』 白禱原をとめ 256

▼『神杉』再び爐邊の歌（二六一—一六九）

一六一 『玄冬』 洛北雜詠、爐邊感慨 5

○腕組み居れば—腕組み居れば

一六二 『玄冬』 洛北雜詠、爐邊感慨 5

○嚴しきは—嚴しきは

一六三 『玄冬』 洛北雜詠、爐邊感慨 6

一六四 『玄冬』 洛北雜詠、爐邊感慨 6 ○夜を爐邊に—夜を爐邊に

○在るもかしこき—在るもかしこき

一六五 『玄冬』 洛北雜詠、爐邊感慨 6

○たたかひ思へば—たたかひ思へば

一六六 『玄冬』 洛北雜詠、爐邊感慨 7 ○爐邊にゐて—爐邊にゐて

○何の祈念に—何の祈念に

一六七 『玄冬』 洛北雜詠、爐邊感慨 7 ○寒き膝—寒き膝

○撫でつつ居れば—撫でつつ居れば

一六八 『玄冬』 洛北雜詠、爐邊感慨 8

○夜ふかく—夜ふかく

一六九 『玄冬』 洛北雜詠、爐邊感慨 8

○われ爐邊にゐて—われ爐邊にゐて

▼『神杉』撃滅（一七〇—一七二）

一七〇 『玄冬』 聖戰抄、撃滅 120 ○比叡が嶺の—比叡が嶺の

○雪の嚴しき—雪の嚴しき

○ひた撃ちどころ—ひた撃ちどころ

一七一 『玄冬』 聖戰抄、撃滅 121 ○ひた撃たむ—ひた撃たむ

一七二 『玄冬』 聖戰抄、撃滅 121

▼『神杉』十二月八日（一七三—一八三、削除7）

一七三 『玄冬』 洛北雜詠、十二月八日 13 ○八日の朝の—

八日の朝の ○比叡の空見る—比叡の空見る

一七四 『玄冬』 洛北雜詠、十二月八日 13

○癖つきぬ—癖つきぬ

一七五 『玄冬』 洛北雜詠、十二月八日 14 ○みことのり—

大詔 ○霹靂鳴れり—霹靂鳴れり

一七六 『玄冬』 洛北雜詠、十二月八日 14

○八日の朝の—八日の朝の

一七七 『玄冬』 洛北雜詠、十二月八日 14 ○嚴として—嚴

として ○思ひ出すたび—思ひ出すたび

一七八 『玄冬』 洛北雜詠、十二月八日 15 ○大東亞—大東亞

○戰爭起り—戰爭起り

※ 出典の字体は「起」。「起」ではない。

一七九 『玄冬』 洛北雜詠、十二月八日 15 ○わび居の庭の

—わび居の庭の ○石に降る—石に降る

一八〇 『玄冬』 洛北雜詠、十二月八日 16

削除7 『玄冬』 洛北雜詠、十二月八日 16

○土佐の酒麻呂—土佐の酒麻呂

○思へばかなしも—思へばかなしも

一八一 『玄冬』 洛北雜詠、十二月八日 17

○水仙の花—水仙の花

一八二 『玄冬』 洛北雜詠、十二月八日 15

一八三 『玄冬』 洛北雜詠、十二月八日 16 ○身震へし—身

震へし ○朝も昨日の—朝も昨日の ○ごとしと思

へや—ごとしと思へや

▼『神杉』閑居雜詠（一八四—一八七）

一八四 『玄冬』 洛北雜詠、春日籠居 32 ○觀音は—觀音は

一八五 『玄冬』 洛北雜詠、鵜の歌 48 ○戦さにこころ—戦

さにこころ ○鵜の聲も—鵜の聲も

一八六 『玄冬』 洛北雜詠、鶯の歌 52 ○この鶯—この鶯

一八七 『玄冬』 洛北雜詠、鰯を焼く 54

○鹽の鰯の—鹽の鰯の

▼『神杉』卷後に（一八八、削除8）

一八八 「高志消息、新村出博士へ」（「高志」二卷五号）

○三越路の—三越路の ○中つ國邊に—中つ國邊に

削除8 「高志消息、新村出博士へ」（「高志」二卷五号）

○國を思ふ—國をおもふ ○わび寐して—わび寐し

て ○京へかへらむ—京へかへらむ

附記

本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」（同志社大学人文科学研究第20期研究会第3研究（二〇一九—二〇二一年度））における研究の一部である。田坂憲二が翻刻・出典・注記の基礎原稿を作成し、南里一郎が全体の修正と異同原稿を作成し、福田智子が再度全体の修正を行い、最終的に田坂が全体の確認を行った。

貴重な資料の調査・研究・公開に、御高配を賜った京都府立京都学・歴史館に深謝申し上げる。特に、様々な御教示を頂戴した大塚活美氏、若林正博氏に厚く御礼申し上げます。

猶、前記、和歌文学会で行った報告を受けて、二〇二〇年一月二十七日、共同通信社の配信による「吉井勇 幻の歌集原稿発見」という記事が、中日新聞・神戸新聞・高知新聞などに掲載されている。